

討論メモ

令和4年4月19日

「戦意の研究」

1. 4月は、浅井壮一郎さんが長年にわたって研究を続けてこられた戦意の重要性についてプレゼンテーションをしていただきました。

シカゴ大学の W.H. マクニール教授によれば、17世紀前後、ヨーロッパでは、自然科学の発達と軍事論の進歩という2つの大きな進歩があった。軍事論の進歩とは、「戦意の重要性とそれを生み出す団体訓練原理」の発見であり、「この発見は万有引力の発見に比すべき発見で、それ故ヨーロッパ軍が最強になった」と同教授は述べているそうです。

また、クラウゼビッツの「戦争は他の手段をもってする政治の延長である」という戦争原理は「戦争で簡単に目的を達成できるなら武力で決着。だが相手が強力で、戦えば味方の損害も大きく、目的利益が武力コストに引き合わなければ交渉だ」という論理も述べているそうです。

浅井さんには、過去数百年の様々な戦争の実例と照らしながら上記の原理を検証し、特に、戦意の重要性をご指摘いただき、戦意とは結局「味方を見捨てて逃げない倫理」であり、それ故普遍的価値を持った。現在、団体教練を行わない軍隊はない、とご説明いただきました。

また、戦意は戦争の結果を左右するだけでなく、戦争の抑止力としても重要であることをご指摘いただきました。

2. 続いて出席者9名による討論となり、下記のような意見が出されました。

・アフガンでは米軍が撤退したら、政府軍はすぐに逃げてしまったが、ウクライ

ナでは、ロシア侵攻に対して徹底抗戦している。戦意の差を感じる。

・しかし、ウクライナには欧米、NATOの強力な支援がある。徹底抗戦は戦意

だけの問題だろうか？

- ・ウクライナ戦争の背景も戦闘の状況も情報が偏っていてわかりにくい。
- ・欧米は実質的には戦争の当事者だから、欧米の大手メディアが、親欧米、親ウクライナの報道をするのは当然ともいえる。しかし、日本は中立の立場で、公平な報道をすべきところが、欧米よりの報道に終始している。
- ・欧米の主導している対露経済制裁には BRICS のブラジルもインドも中国も与していない。アジア、中東、アフリカ諸国も冷静に対応している。

日本も本来ならば、中立を保ちながら、早期の停戦実現に尽力すべきではないのか。

- ・ロシアは、ウクライナの予想外の抵抗にあって、短期決戦の目論見が外れ、キエフより撤退し、膠着状態に入っているようだ。
- ・戦争が長引いて、戦争ビジネスにとっても、エネルギー・メジャーにとっても、穀物メジャーにとっても狙い通りの展開になっている。
- ・米国はコストの高いシェールガスの採算の取れる価格まで引き上げようとしている。
- ・“戦意”は戦争ばかりでなく、人間社会の在り方としてとても重要な問題だ。

- ・平和は戦力の均衡状態でなければありえない。

- ・戦争を行うか否かの決断は、戦争目的と目的達成のためのコストとの兼ね合いで決まる。

- ・ウクライナがロシアの侵攻を止められるかどうかは、中国の台湾侵攻にも影響を与える。

- ・アフガンも南ベトナムも政権が腐敗していた。戦意と倫理が必要だ。

- ・フィリピンに残る特攻隊のマバラカット基地やクラーク飛行場には、米軍が建立した、日本軍の勇敢さをたたえる慰霊碑がある。

- ・英米軍も日本軍の勇気ある戦いに敬意を表していて、横須賀にもペリユリュー島にも慰霊碑が残っている。

- ・日本軍の強さは連帯感の強さにある。

- ・戦後の日本は、日米繊維交渉などで、団体としての強さで、米国に恐れられていた。まとまりとしての日本の強さが段階的に壊されてきたのではないか。

- ・戦意は強力な抑止力になる。平和を保つためには抑止力が必要だ。

・ロシアの侵攻ばかりが一方的に非難されるが、NATO の東方拡大などによるロシアの受けている脅威も忘れてならない。

・ロシアの旗艦が沈没したが、重要な作戦データも失われたかもしれない。

・何百万もの避難民が出ているが、帰還できるのだろうか？

・ウクライナ地区は過去二千年も紛争の続いてきた地域だ。

・同地区はハートランドと呼ばれ、民族が混じり合い、領土の奪い合いが続いた地域だ。次はアゼルバイジャン辺りが危ない気がする。

・“戦意”と聞いて、オスマントルコがハンガリーに侵攻した際に、渡ってきた橋を落として退路を断った昔話を思い出した。

・ラオスにいたときに、ディエンビエンフーの戦いに、ラオスの人が支援に入った話を聞いた。国境を越えて民族の連帯があったのだろうか？

以上